

# ウォルゾン・リンカーン・システムとしての〈本〉

本年は瀧口修造生誕120周年にあ

たります。それを記念し、瀧口

資料を分有する富山県美術館と

慶應義塾大学アート・センター

での共同企画展示を行います。

本展は富山県美術館（瀧口修

造コレクション室）にて行われる

とともに、慶應義塾大学（三田

キャンパス東館6階G-Lab）で行

われるシンポジウムとセンター

を共有しています。

詩人、展覧会のオーガナイザー、美術評論家、造形作家と多様な活動を繰り広げた瀧口修造（1903-1979）は、通称「手づくり本」(handmade brochure) と呼ばれる不可思議な本を制作しています。それは出版社や印刷所のプロセスを経ていない、瀧口自身の手仕事による本であり、雑誌の切り抜き、紙、ラベル、シール、手書きのメモ等、いわゆる断片の組み合わせで構成され、完成されているようにも、未完成であるようにも見える本です。「永遠に鑑みられず、丁づけされない本」を志向していた瀧口にとって、本が仮設的な状態にあることはとても重要なことだったと考えられます。

ウォルゾン・リンカーン・システムとは、左から見るとウォルゾン大袂領が、右から見るとリンカーン大袂領が見えるといった、左右それぞれから見ると別の顔が浮かび上がる二重の肖像画に似た仕組みであり、瀧口修造自身が「マルセル・デュシャン語録」にもデュシャンの用いた言葉として登場します。

本展では、書店を中心に流通する一般的な本と「手づくり本」とを対極的存在として精査し、その間で揺れ動く存在として瀧口の「マルセル・デュシャン語録」(1968年)を位置づけます。ウォルゾン・リンカーン・システムを想起させるような、双極の間に現れる多様なイメージを持った本である「マルセル・デュシャン語録」を通して、瀧口がどのように「本」と制作を捉えていたのか、さらには「本」とは何かについて考えます。

## ● 瀧口修造生誕120周年記念

ウォルゾン・リンカーン・システムとしての〈本〉  
2023年11月21日-2024年2月6日 | 富山県美術館6階G-Lab  
観覧時間：9時30分-18時（入館は17時30分まで）  
休館日：毎週金曜日（祝日除く）祝日/休館日・年末年始は臨時休館・休館する場合があります  
主催：富山県美術館、慶應義塾大学アート・センター

## ● 瀧口修造生誕120周年記念シンポジウム

瀧口修造展覧会特別発表「パリエリアエ 01：繕書のタブローをつくること（鑑賞者参加などを行う……）」  
2023年12月9日、13時-14時 | 慶應義塾大学三田キャンパス東館6階G-Lab  
主催：瀧口修造研究会（慶應義塾大学アート・センター）

「瀧口修造研究会：慶應義塾大学アート・センターでは、2021年に追悼展から資料を寄贈いただいたことと機縁となり、「瀧口修造ウォルゾン・リンカーン」を開設。そのアートの機縁を契機として、2023年6月からはじまる研究・創作活動の活性化を目的とし、学内外の研究者・アーティストで構成された「瀧口修造研究会」を立ち上げた。

「パリエリアエ」(パリエジオネ (paraphrase))とは、瀧口が「手づくり本」に書けるものの付いた名称である。直訳すると「書き得た本」だが、直訳の意味ももちろん、「パリエジオネ」=「翻写」(1936年)の「流し」に元来、のほごの、次のような説明がある。「いく人々の人間に、一知乃至は以上のアートを享受させることでなりつ、パリエジオネの意」(『アートのアトランティック』、ポプラ社、1978年)。『パリエジオネ』は『アトランティック』に著述集、現代思想社、1971年、6頁、扉を閉鎖しつづつ「部語」を転記した。扉の裏中、扉の人が書いた「書いたものは訂正されて隠され、次の人は見ることができない。